

第1回、第2回点検意見に対する取組の 追加報告

＜生物多様性の認識を深め、
普及啓発する取組＞

「生物多様性をどう伝えるか」

生物多様性の認識を深め、普及啓発する取り組み

日本環境ジャーナリストの会からの報告

佐藤年緒（同会理事、元時事通信編集委員）

1、会の概要と研究会の設置

日本環境ジャーナリストの会（芦崎治会長）。1991年7月に設置された当会は、環境問題に関心を持つジャーナリスト、ライターらが会社やメディアの違いを超えて交流。毎月、内外の専門家を招いて勉強会を開いているほか、アジア各国の環境ジャーナリストを日本に呼んで交流などを行っている。現在、会員82人。

新・生物多様性国家戦略を進めるにあたって「生物多様性」の大切さを、国民により分かりやすく普及してゆく方法はないかとの環境省側からの相談を受け、当会と同省が連携したプロジェクトとして取り組むことを決め、生物多様性の理念や現状を、専門家からのインタビューと取材で学びながら、生物多様性の重要さを各種媒体を通じて分かりやすく伝えることになった。

2004年7月に会のなかに「生物多様性研究会」を設け、メンバー22人が参加。環境省などの会議室で、専門家から話を聞くことを基本に、フィールドでの取材を行った。取材後は、複数の雑誌やインターネット・ウェブに掲載、また全体をまとめて単行本としてこのほど出版した。

2. インタビューの特徴と留意点

自然を相手にユニークな活動や実践をしている人たち、専門家の計19人にインタビューした。人物にスポットを当てて、その人がどのようにして自然と深くかかわりようになったか、生物多様性をどのように捉えているかなどを聞き、自然と人間とのつながり、生物の多様性を回復していく上での考えや提言を聞いた。

生物多様性という言葉の持つわかりにくい概念を、どう表現するか、また日本の風土にあった表現で、その大切さを伝えられないかなども意識した。

インタビュー対象は、生物学や生態学の分野だけでなく、文化や芸術（写真、音楽）、哲学、民間活動家、宇宙飛行士など、広い分野で、さまざまに活躍している人を対象とした。

< 研究会での講演と事後取材 = 14人 >

柴田敏隆（コンサベーションイニシアチブ）、三島次郎（生態学者）、岩槻邦男（植物生態学）、永田芳男（植物写真家）、内山節（森林づくり）、岡安直比（WWF J 自然保護部長）、小久保隆（環境音楽）、丸山茂徳（東工大教授、地球惑星科学）、南正人（ピッキオ社長）、濱田隆士（古生物学者）、高野肇（森林総合研究所主任研究官）、羽山伸一（獣医師）、加藤尚武（環境倫理学）、毛利衛（宇宙飛行士）

< 個別会見の設定 = 1人 >

レスターブラウン（環境経済家）

< 地方における個別取材のみ = 4人 >

佐藤昭人（藍師）、佐藤洋一郎（植物遺伝学）、那須正幹（児童文学者）、萱野茂（二風谷アイヌ資料館長）

3. 利用したメディア

掲載したメディアは以下の通り。

月刊誌「山と溪谷」(山と溪谷社)(連載6回、2005年2月 8月)

週刊「世界週報」(時事通信)(連載11回、2005年6月 11月)

「グローバル・ネット」(財団法人・地球・人間環境フォーラム)

(14人分、2004年12月 2005年10月)

環境GOO「生物多様性を考える」(インターネット・ウェブ、計13回)

単行本「つながるいのち 生物多様性からのメッセージ」

(山と溪谷社、11月末)

4 . 浮き彫りになった大事な視点

種の多様さという視点だけでなく、いのちのつながりを意識する
食を通じて人間と他の生物との関係を知る

食糧の需要によって地球の生態系が崩れている

米への嗜好や経済性から稲の単一化が進み、安定性を欠くようになった
人と大型動物との戦いや確執が続く

ツキノワグマ、シカ、イノシシ

かつての大型動物の絶滅、進化の歴史があった

マンモス、恐竜

遺伝子的な説明による人と生物との関係を知る

いのちを「いただく」精神と生活を知る

山村の生活やアイヌ民族の伝統

音楽や文学、伝統文化を生んでいる

食や遊び、殺生によって、いのちの尊さを知る

自然が都市の居住者にとって精神的に必要である

自然に対する欧米思想と日本の思想の違いと共通性

科学で未解明なものが多く、人間はすべてを知っていない

宇宙視野で過去から未来を見る必要性

5 . 生物多様性の理解と普及への課題

- ・ 食べることとその食材をどう得ているかの理解が必要
- ・ 「自然」と「生物多様性」との違いを意識する
- ・ 観察の対象としてだけでなく、人間との関係、人間の生き方、価値を含む形で伝える
- ・ 「保護」を担当する環境省の仕事だけではない。「利用」という面で生産や貿易からも考える
- ・ 固有の文化とその背後にある自然、生態系をより深く理解する
例えば、採取と狩猟、里山と文化へのかかわり
- ・ 生物資源をめぐる途上国との関係（南北問題）の視点を補う
- ・ 教育（学校教育、社会教育）のカリキュラムへの導入や、身近な自然に親しむ総合学習型など、環境省と文部科学省が一緒になった取り組みを。
- ・ 理科の一部ではなく、歴史や社会、地理あるいは文学、写真などの芸術を通して、人と生き物とのつながりを伝える。
- ・ 地域や地球の生態を知り、生涯学習の場となる博物館の充実
- ・ 専門家と一般の人をつなぐ「翻訳家」の役割としてメディアやジャーナリストに担ってもらう。

【参考】まとめの見解

「浮き彫りになった人類生存のキーワード」

地上の生態系のバランスが崩れ、多くの生き物が絶滅に追いやられている。その現状を伝え、人間と多様な生き物たちとの関係はどうあるべきかを考えるシリーズの紹介を終えた。

これまでインタビューをした専門家は、古生物学者をはじめ音楽家、児童文学者、環境活動家、植物学者、哲学者、宇宙飛行士ら19人。地球で生命が誕生した歴史から始まり、予見される地球の未来まで、時間と空間を広げた視野で人間と生命との深いかかわりについて新しい角度から聞いてきた。浮き彫りになったのは、人が自然を利用し、恩恵を得ているという、気がついてみれば当たり前前の視点だが、人類の存続に欠かせないこの「生物多様性」が危機にあるという認識である。

分りやすいのは、例えば「食べる」ことを通した理解である。レスターブラウン氏が指摘したように、人口増に対応した穀物生産によって、熱帯林の生態系破壊が進んでいる。佐藤洋一郎氏が言及した効率を第一にした稲作の単一品種化によって、安定した生態系の崩壊が起きている。古代の動物マンモスも、温暖化で食料を得られる環境に生息できなくなったときに絶滅の運命となった。国内でも現在、食料をめぐるクマなどの大型動物は、人間と折り合いがつけられなくなっている。

恩恵は、さまざまな植物からの薬の発見などは人の健康や衣食住に及び、良好な水と土と植物が揃って初めて成り立つ伝統的な藍染めなど地域の文化にも深くかかわる。人の精神を支える基盤でもあり、環境音楽家の小久保隆さんは、故郷の東京に住む人に、多様性豊かな自然からのメッセージを音楽によって伝えている。それが現代人のいやしとなっている。

少年時代に自然の中で奔放に遊んだ作家那須正幹さんは、昆虫を殺すことで、一種の後ろめたさや罪悪感を持ち、生命の尊さを知った。柴田敏隆さんは殺生して食べることを意識する教育の大切さを説く。

「自然のなかに生き、山や川から食べ物をいただいているという感謝の気持ちを忘れない。川は魚の通り道で、クマに餌を供給する命の道。山は鳥や獣の家。役目もなしに、天から降ろされたものはない」というアイヌの教え。「人間が自然に対して持つ気持ちの中には、時代や地域を問わない素朴な宗教的直感が、深いところで存在している」と加藤尚武さんが言うように、東西を問わず、畏敬の念や宗教性につながっている。

宇宙船「地球号」と言われるように、地球を生命体として考える巨視的な視野、さらに生命進化のダイナミックな見方でとらえることの必要性も語られた。生物種をまだ数えきっていないだけに、人類や科学者も謙虚さが必要だと説く見解も多かった。

馴染みにくい「生物多様性」という言葉に代わって、より分りやすい表現がないかと模索したが、「さまざまな生物についての知識や経験を再統合して初め

て成り立つ概念。生物の専門家の間でも確固とした定義や指標が確立しているわけでない」(加藤尚武さん)との説明に合点が行った。確かに「種」とは何かといった定義すら揺れ動いている。

バイオダイバーシティの直訳であるが、もともと、「多様性」という言葉が人種の多様性など社会学的に一般に使用されていた言語に「生物学的な」と付け加わった経緯もある。「多様性」の言葉自体になかなか言葉が一般化していない日本だけに、普及しにくいように思える。「ダイバースには時間的・空間的発展という概念があり、単なる多様ではなく進化の意味も含みません。生物の種類が多ければよいのではなく、生物を自由に進化させて行くところにゴールがあるのです。これに代わる適切な日本語が見つかりません」(羽山)との指摘もあった。

日本語で近い言葉としては、万物一体、森羅万象、一木一草、つながる生命、八百万(やよろず)のいのち、しなやかないのちの流れ、などがあつた。万物一体は、古代西洋の概念にもあつたという。上記の日本語は、いずれも科学的な定義にぴったり重ね合わせることはできないが、「生物多様性」という、生物を観察の対象とする科学用語とは違つた、人間も自然界の一部であり、自然との関係、人のいのちや生き方も含めた包括的な響きを伴つた言葉として、親近感を感じるものだつた。

とはいえ、その日本国内では、自然と人との関係は、森林や農山村においても、過疎化や高齢化もあつて、ますます希薄になる傾向である。食料や木材などの資源を海外に大きく依存している現状で、世界には胸を張れない状態が続いている。生物多様性の保全の政策をさらに推し進めるためには、旧来の環境行政だけでなく自然から生産物を得る農林水産業や貿易、教育、文化といった分野での施策の徹底を図ることが必要だろう。「保護」と「利用」、また「国内」と「国際」、いずれもコインの表と裏のように切り離せない問題として解決を求められている。(佐藤年緒)

【参加メンバーの認識の深まり】

多くのメンバーが認識を深めていく機会となった。何人か感想を聞いた。

- ・ 天敵がいなかった海洋島に、いったん移入種が入り込むと固有種がいかに絶滅に追い込まれるかという現実を知った。地形の成り立ち、生態系の歴史などの科学的な基礎知識をより丁寧に伝えることで、人々が地域の動植物に経緯を払うことになるのではないかと。
- ・ 生物多様性の持つ多面的な点に発見が多かった。音楽、哲学、教育、倫理、文学など、社会活動、文化活動のあらゆる土壌になっていることが、インタビューで切実に伝わってきた。
- ・ 一般への啓発という意味では「生物多様性」という漢字5文字を重ねた言葉を国民に広く普及させようという政策は、そもそも非常に無理があった。「いのちのつながり」の普及を提案した。
- ・ 生態学を理科の一部ではなく、独立した総合科目として小・中学生の義務教育のなかで取り上げるべきである。理科の範疇を越えて、歴史と社会、地理あるいは文学、写真などの芸術の力を借りて、世界に誇れる素晴らしい「環境の教科書」がつかれるだろう。
- ・ これまで種の多さが生物多様性を支えていると思っていたが、個が多様なことが種を存続させ、全体として多様な種が存在する状況を生み出すことが分かった。
- ・ 生物の多様性で支えられる自然と人とのつきあい方は、直接生き物とかわることだけでなく、行き方、日々の生活の作法、暮らしの技術に反映されるという。今後は生物学的な方面からでなく、文化的なアプローチも考えたい。
- ・ 動植物の保護というと、一般に絶滅の危機にあるような特定の種の保護を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。私もそう思っていたが、基本的な考え方は、すべての生物と生態系を保全してということだ。言い換えれば、ある特定の種を保護するだけでなく、多様な生態系のつながりそのものを守っていくことだといえるだろう。
- ・ 自然界を個々に切り離すのではなく、全体像のままに感じるということと、生物多様性を守るという意味での自然界のつながりを理解することは無関係では内容に思う。

【参考】＜各専門家からのキーワード＞

永田芳男さん（植物写真家）

- ・植物は動物たちに空気を提供し、水を浄化し、食物をもたらしてきた。暮らしの衣食住を支え、歴史や文化を育む土壌になってきた。
- ・植生の全体を伝える写真を撮る。
- ・自然が好きで、植物が好きで、実物が見られるというワクワク感
- ・生き物同士のつながりは密接。ひとつの植物の絶滅が、その植物を利用するたくさんの虫の絶滅を引き起こし、さらにその虫を食べるクモや鳥、さらにその上の哺乳類までの影響を与える。どんな影響を与えるか、誰にもわからない恐ろしさがある。
- ・河川敷に生えていた「雑草」を絶滅から救いたい。

内山節（哲学者）

- ・村の人たちにとっての動物は、村でともに暮らしてきた仲間。イノシシは、すべて利用できるから、狩をしても許されるという意識がある。自然のものをいただくが、いただいた以上はすべてを利用する。それができずに殺すだけというのは嫌なのです。
- ・木を切らなくなったことによる草原の喪失。小動物の減少。共通財産である場所での生産物の「ほどほどの利用」、能率の悪いお年寄りの仕事を持つ家庭内の「多様性」の大事さ。

南正人（ピッキオ社長）

- ・環境と経済の両立を目指すリゾート会社。生態系の頂点にいる熊、豊かな森の象徴、ごみを餌にするようになった熊。熊（ツキノワグマ）とどのように共存していったらよいか、駆除か追い返すか。生態系のなかの熊の役割を科学的に証明し、同時に人間の安全性を守ることが大切という。
- ・身近な生き物の背後にある生物間の相互関係や進化の法則、生態系の大原則を理解する助けになる情報を提供することによって、参加者がより深く自然を理解できるようにする。ここまできて、エコツアーガイドやインタープリターと言えます。

萱野茂（二風谷アイヌ資料館）

- ・山や川から食べ物をいただく。山菜を根こそぎ採り尽くさない。自然のなかに生き、山や川から食べ物をいただいているという感謝の気持ちを忘れなかった。川は魚の通り道であり、クマに餌を供給する命の道。山は鳥や獣の家。役目もなしに、天から降ろされたものはないというのがアイヌの教えです。
- ・現在の日本の食糧自給率は40パーセントと低い。約60パーセントの食べ物はよその国から買っている。まるでとなりの家の倉を頼りに食べているのと同じ。もう売りませんと断われたら飢え死にです。

- ・ 相手を大事にすることで、あなたも大切される。それが共生の道だ。

岡安直比（サル学者、WWF ジャパン自然保護室長）

- ・ ヒト、ゴリラ、チンパンジーのそれぞれの祖先は、ある時期、熱帯林の中で同じ空間を共有していた。これらの先祖は食べ物もよく似ていたため、やがて激しい生存競争が生じてきた。ヒトの祖先が生存競争に負けて、豊かな森の外の草原に追い出された。

- ・ 日本人は自然への畏敬の念を現地のヒトと共有できる。欧米人はキリスト教の影響なのか、自然と人間を峻別し、人間が自然を管理できるという感覚をいまでも強く持っています。地元人を排除して自然保護区をつくったりすることもある。

- ・ 欧米の研究者はチェックシートをフィールドに持って行って、記号でサルの行動を秒単位で記入していきます。大量の論文を書くにはこの方法は適している。しかしこの方法だけでは、フィールドワークのプロにはなれない。

- ・ 自然のエッセンスを全身で受け止める。全体像を理屈だけではなく肌でつかむ。

- ・ ヨーロッパ人は、自然を破壊しつくした人々。寒いので自然の多様性はそれほど豊かではない。それを破壊してしまった。だから自然に憧れる。自然は貴重なものだという意識が強く芽生え、これが自然保護区と国立公園という制度を生んだ。一方、アジアには豊かな自然があり、その再生力はたくましかった。逆にその大切さを気が付かなかったかもの知れない。

岩槻邦男（植物分類学）

- ・ ヒトの受精卵も個体になるまでに、ひとつの細胞が60兆に分裂します。60兆の細胞は有機的にかかわりあって一つの個体を作り上げているのです。種のかかわりは、30数億年の、生命の進化の歴史を通じて演じられてきたもので、種と種のかかわり合いの環は数千万とも、億を超えとも推計される生物全ての種を、あるいは強い絆で、あるいは弱いかかわり合いで、全て連結してしまうことになります」。

- ・ 地球上に生をうけた種はすべて、直接的・間接的に地球上の全ての種をつなぐ環のうちに組み入れられており、地球生命系は1つのまとまった系として実在している。私たちのほっぺの筋肉細胞も足の裏の細胞も1つの細胞から出発しており、（このように）全ての生物は一個の細胞からスタートしている。

- ・ 私たちは、しばしば、単独に生きていると考えておりますが、私たちは周囲と一緒に生きているのです。個体の生が大切だというならば、地球生命系の生も大切なのです。生物多様性を言うとき、自分の細胞の1つ1つが大切なように、地球上の生物の中には、いいかげんでどうでもいいような生命は1つもないといって視点が必要になります。

柴田敏隆（コンサベーションイスト）

・生物には、自らを養い、種族を増やそうという不思議な力が内在している。一方で、自然には特定の生物だけが増えるということがないように、数々の制限を生物に課して、生態系全体のバランスをとろうという力が働く。これに人間の活動が加わる。生息地が破壊されることもある。生物の内発的な力と、自然と人間による制限要因の組み合わせで、生態系が作られているのだ。

・一神教に基づく自然観（人間は神の代行者として自然を思うままに利用できる）に立っていた欧米も変わり始めています。例えば、『宇宙船地球号』という言葉には、地球上に生きるすべての生き物を同列に見ようという意識が感じられます。人間優位を説く一神教の世界に画期をなす。さらにドイツやアメリカの学者は、『一神教は人間優位を説き過ぎた。神父・牧師は、論理構築を見直すべきだ。（すべての生き物の平等性を説く）ヒンズー教と仏教は環境倫理に整合性が高い』と言っています。これは明らかに『生物間倫理』を指している。

・ただ『絶対反対』を叫ぶだけでは何の成果もありません。開発側を巻き込んで、新しい自然の保護、修復、育成、増加の具体策をとることこそ急務。環境管理が適切に行われ、野生の鳥獣、爬虫類・両生類が内発する自活の能力で復活増加する。

・自然は複雑で多様性に富み、しかもファジイであります。豊かさとか、ものすごさ、多彩さ、複雑さ、可憐さ、恐ろしさ、神秘性、いとおいしさ。そういったものを全部ひっくるめたものが多様性です。

加藤尚武（環境倫理）

・人間が自然を利用することは避けられないので、人間の利用を認めた上で、どのような利用をすべきかを深く掘り下げた考え方は自然保護思想として優れている。

・江戸時代の儒学者・熊沢蕃山は、人間が積極的に山や森林を管理する政策をとることによって、山川が適切な状態に保全されるべきだと言っている。"動植物が元気でないと自分の心がしおれ、元気になれば自分も嬉しい。万物は一体である"という内容や、"人間は小さな自然であり、自然は大きな人間である"という意味の言葉も残されています。

・こういう考えは東西を問わず古くからある。西洋でもギリシャ末期のディオゲネスに始まり、ルネサンス期のパラケルスス、18世紀のゲーテが同じようなことを言っています。自然に対する考え方の歴史をたどると、東西の差はあまりない。

・自然を愛し、自然を保護するという気持ちのなかに、「生物多様性を愛する」という考えが含まれるとは思えない。哲学的に表現すると、「生物多様性」は、生物世界を観察し、観察する人にとっての「反省的」概念で、愛情とか、感動とかの対象ではない。

・生物多様性はさまざまな生物についての知識や経験を再統合してはじめて

成り立つ概念。生物を集合として記録・研究する学問が発達する中で徐々に形成され、おそらく 20 世紀後半になって社会生物学という学問の成立と同時期に確立した、とても新しい学問的な概念だ。

・ふつうの生活の経験の中では、あまり生物多様性という考え方を実感する機会がありませんし、かといって、生物の専門家の中で生物多様性に関する確固とした定義や指標が確立しているわけでもありません。生物多様性そのものを研究している研究者もまだ大変少ない状況です。

・その結果、目標とすべき"生物多様性の望ましい状態"のイメージが 1 人 1 人の価値観によって著しく違っています。山を切り開いて高速道路をつくっても多様性は破壊されないと考える人がいる一方で、生物学者や自然保護論者の中には極端すぎる保護策を主張する人がいるかもしれない。目標がはっきりしない状態が対策を立てることを困難にしています。

高野肇（森林総合研究所主任研究官）

・アカガシラカラスバトを絶滅させることは、村の財産をなくすことに等しい。

・希少種を保護するための「見せない」エコツーリズムが構築された。

濱田隆士（古生物学者）

・進化した大型で高等な動物になればなるほど、食物である他の動物や植物という生態系に依存するため、環境の変化に弱く、絶滅する率はそれだけ高くなる。

・地球の生命は全部ネットワークですから、決して人類だけで独立して生きられるわけではないはずです。人にとって他の動物も魚も必要。その一つが欠けたら、その影響をどう推定するかまったく見えていない。

・生き物を理解する上で起源、始まりはすごく大切です。絶対にどこかでつながっている。いのちの流れはつながりながら変化していく。ここで終わったということではなく、うねりのようなダイナミクスがある。

・人間はわがままな動物で、自分のことも分っていない。人間同士も理解できずにけんかをしているのだから、他の生物のことを理解しようと思ってもなかなか難しい。

那須正幹（児童文学者）

・意識していなかった自然の不思議さやすばらしさを、知識として確認できる喜びを知りました。体験を科学知識と結びつける過程がないと、自然を正しく理解することは難しいかもしれません」

・子どもはカエルをストローで膨らませたり、ヘビを振り回して殺したりと残酷な一面を持っています。もちろん私もやりました。でも昆虫を殺すことで、一種の後ろめたさや罪悪感を持ち、生命の尊さを知ることでもあります。五感を使って『虫とは何か』を知ることができるのが昆虫採集。写真を見ただけでは

自然と触れ合ったことにはなりません。

・これまで無秩序に開発を進めてきた人間がもう少し後ろへ下がった方がいいでしょうね。生息数が少なくなっているクマを捕獲してすぐ殺すのではなく、初回だけは放獣して生き延びるチャンスを与える選択があつていいのでは。

小久保隆（環境音楽家）

・人にとって自然とは元来怖いもので、決して快適なものではなかった。狩猟生活を中心とした縄文時代から定住型の弥生時代を経て現代にいたるまで、人は便利になろう、楽をしようとしてずっと考えてきました。手間をかけずにお腹を満たし、安全を確保するために村が生まれ、その進化した形が今の都市です。そうした過程で、何か大切なものを忘れてしまった。それは自然の音です。自然の持っているバランスの良さを、音を通して東京のような都市空間の中にも取り戻したい。

・仙人は気を吸って長生きすると言いますが、ジャングルや熱帯雨林をはじめとした自然界には、そうした気を生み出すエネルギーがある。二酸化炭素の吸収源としてとか、木材の供給源として森林保護が語られますが、そうしたことは本質的ではありません。僕はそうした自然界のエネルギーを音にして、ジャングルから遠く離れた都市生活者に届ける役割を担っている。僕が音楽をつくっているのではなく、自然界のメッセージを伝える媒体に過ぎないのかもしれない。

羽山伸一（獣医師）

・ダイバースというのは放散という意味ですから、その中には時間的・空間的發展の概念があります。単なる多様ではなく進化の意味も含みます。生物の種類が多ければよいと言うのではなく、生物を自由に進化させて行くところにゴールがあるのです。適切な日本語が見つかりません。

レスターブラウン（環境経済学者）

・「史上最大の大量絶滅」とは何か。ブラジルの熱帯雨林だけでなく、インドネシア、マレーシアで、穀物を得るための伐採だけでなく、ピークを向かえた石油に代わる車の燃料として、サトウキビを植えたり、パームオイルを植えるために伐採をする。それが、6500万年前に続く地球史上第6番目の種の絶滅の危機を迎えることになる。

・人類は地球の再生産能力を超えて自然資源を収奪し、気候を温暖化させている。さらに言えば、持続可能ではない領域に踏み込んだ。

・日本は水に恵まれ、水田という、連作障害のない持続可能な生産システムがありながら、食料自給率が40%というのは、なぜなのだろう。私が担当大臣なら、少なくとも40%をさらに引き下げることには絶対にしない。また、現在の農業従事者の5割以上が65歳以上というのは一国のフードセキュリティとして不安感はないのだろうか。

毛利衛（宇宙飛行士）

・四つの塩基の配列によって生物が決まる。神に近づきたいということで発達した科学が行き着いたことは、人間は特別な存在ではなく、他の地球上の生命と変わりのないということ。宗教に関係なく、客観的な事実だけに基づいた普遍的な認識です。われわれは地球上の生命とつながっていること、過去 40 億年間のつながりのなかに多様化して今があることが分ったのです。

・科学技術という道具を持って宇宙に飛び出そうとする人間の脳は、陸に進出した生物の肺、空を飛んだ始祖鳥の羽に相当する。いま、未来につなげるためには、生き延びる能力や厳しい環境に進出できる能力を研ぎ澄まし、個々人の挑戦だけでなく、人類という種全体の挑戦につなげていくことが必要です。

・科学者が知っていることはごく限られています。科学者は傲慢になることを慎まなければなりません。むやみに殺生してはならないという仏教の教えがありますが、生物とつながっている人類が生き延びる知恵です。

【参考】生物多様性研究会の参加者

これまで生物多様性研究会の勉強会に出席、または執筆したメンバーリストです。

- 滝川 徹（毎日新聞社編集委員、日本環境ジャーナリストの会会長、2005年6月まで）
- 佐藤 年緒（環境・科学ジャーナリスト、元時事通信編集委員）
- 岡田 幹治（元朝日新聞論説委員）
- 岸上 祐子（（社）高知県生態系保護協会理事）
- 佐藤 淳（読売新聞科学部）
- 中西 博之（元埼玉新聞編集委員）
- 岩谷 忠幸（フジテレビ気象キャスター）
- 屋木 伸司（中央法規出版）
- 中野 美鹿（フリー、野生動物）
- 水口 哲（環境ジャーナリスト、博報堂）
- 水野 憲一（元NHK、TVE Japan）
- 村松 秀（NHK衛星放送特集番組ディレクター）
- 吉田 光宏（フリー、元中国新聞記者）
- 岡山 泰史（山と溪谷社・出版部）
- 田中 泰義（毎日新聞社北海道支社報道部）
- 村田 泰夫（朝日新聞、日本環境ジャーナリストの会副会長）
- 村田 佳壽子（環境ジャーナリスト）
- 関 智子（環境情報普及センター）
- 宮坂 武志（月刊アース・ガーディアン）
- 芦崎 治（フリージャーナリスト、現会長）
- 小島 和子（環境パートナーシップオフィス職員）
- 寺田 千恵（時事通信世界週報編集部）
- 織田 創樹（ワールドウオッチジャパン代表）